

ど頻に催しければ、せんかたなく、さらば病死と披露せんとして、穴を堀せ、目を忍らびて密に法事をなし、すでに時刻いたりぬるに、其わたりに見えず、さればとてよしなきこといひ出て、せんかたなく身をかくしたるにやあらん、されどもまづさがし見んと、そこらもとめしかば、かたはらの柴つみたる小屋に晝寐して高いびきして居たり、道入々々と起しければ、眼を覺し、常のごとくものいひ打わらひ、げに實に入定の時いたれりと、走り行て穴に飛入たり、見聞の人驚かざるはなし、時明和四年閏九月廿四日なり、

〔近世畸人傳三〕桃山隱者附高倉街門守

いかなる人といふことをしらず、伏見桃山に乞巧のごとく、わらむしろをもてかこひたるものして住人あり、いかにしてたよりけん、稻荷羽倉氏のもとにて書をかりて見るこゝつねなり、つひに名をいはず、そこにて身まかりし後、いとさはやかなるさましたる士、供人など供したるが、羽倉氏に來りて、其人の臣なるよしいひて、生涯の恩を謝しけるとぞ、いとあやしきことなり、今は八九十年前、三條高倉街の門を守る化子も、夜時を撃間に、その小屋に書を高くつみて、おしまづきにかへ、書を見居りけるが、これは迎るもの不意に來りて、しひて伴ひ歸りしさまいときらきらしかりしと、其街の人老の後に語られし、相似たることなり、